日本中國學會報　第73集
2021年10月 9 日　発行
抜刷

学界展望（哲学）

渡邉　義浩
長谷川隆一
冨田　絵美
関　俊史
原信太郎アレシャンドレ
高山　大毅

学界展望

前号に告知した通り、今回は「哲学」「文学」部門については、2019 年 1 月から 2020 年 12 月までの 2 年間を、「語学」部門については、2020 年 1 月から 12 月までの 1 年間を対象として記述している。

◉哲　学

一、総記

学界展望（哲学）は、2019 年 1 月から 2020 年 12 月までの二年間に日本国内で公刊された著書・学術論文のうち、著書を中心に展望する。研究分野の分類と担当者は、項目順に、総説（渡邉義浩）、先秦・両漢（長谷川隆一）、魏・晋・南北朝（冨田絵美）、隋・唐（関俊史）、宋・元・明・清（原信太郎アレシャンドレ）、日本漢学（高山大毅）である。

通例と異なり二年分をまとめたのは、新型コロナウイルス感染症の拡大による。渡邉は、コロナ禍のもと学生と共に古典に向き合った。その成果の一つが、渡邉義浩・高橋康浩・伊藤涼・瀧口雅依子編『全訳 論語集解』上巻・下巻（汲古書院、2020）である。『論語』の注釈の中から、最も適切な注に従い、あるいは自らの新たな解釈を発明して、『論語』の持つ真の意味に迫ることは王道であろう。しかし、それと同時に、時代と共に生きた一人の注釈者の思想体系の中で、『論語』がどのように把握されていたかを明らかにすることも、哲学の方法論として重要な意義を持つ。『論語集解』は、何晏一人の著作ではないが、何晏が著したとされる無記名の注から、何晏の思いを抽出することは可能である。朱熹については、すでに土田健次郎訳注『論語集注』（平凡社東洋文庫、2013 ～ 2015）があるので、『論語』の古注・新注の代表作は、いずれも現代日本語で読めることになった。

この二年間で、経書の注釈を現代語訳した最大の成果は、野間文史『春秋左伝正義訳注』第一冊～第六冊（明徳出版社、2017 ～ 2019）である。経学のみならず、史学にも重要性を持つ『春秋左氏伝』の正義が、野間の端正な日本語訳により読めるようになったことの意義は大きい。このほか経書については、すでに『毛詩正義研究』（白帝社、2003）を著している田中和夫の『毛詩正義』の訳注が進められており、『毛詩注疏訳注小雅（三）』（白帝社、2019）が刊行され、西周を「中興」した宣王を詠う一連の詩が翻訳されている。山口謠司『書経』（KADOKAWA、2019）は、『書経』の入門書である。宇野精一『孟子 全訳注』（講談社、2019）も復刊された。濱久雄『易を読む―伊藤東涯『周易経翼通解』全訳』（明徳出版社、2020）は、仁斎の『易経』の見解を継承した東涯の『周易経翼通解』の全訳である。湯浅邦弘編『儒教の名句―『四書句辨』を読み解く』（汲古書院、2020）は、江戸で刊行された「四書」の付録を中井竹山が抜き書きし

た『四書句辨』の全訳である。

また、池田知久『老子 全訳注』（講談社、2019）は、読み下し・現代語訳に解説を付したもので、出土資料を中心とする池田の『老子』研究の成果が随所に記されている。すでに池田知久『荘子 全訳注』（講談社、2014）があるため、老荘思想の基本書に対する池田の解釈を現代日本語で手にし得る意義は大きい。このほか、謡口明『弟子の視点から読み説く『論語』』（朝倉書店、2019）は、弟子の視点から『論語』を漢文で読む入門書である。池田秀三『説苑』（講談社、2019）は、1991年に出版された『説苑―知恵の花園』（講談社）に手を入れたものであるが、冒頭から50ページに及ぶ解説が附され、劉向の執筆意図が解明される。中村裕一『訳注 荊楚歳時記』（汲古書院、2020）は、守屋美都雄『荊楚歳時記』（平凡社東洋文庫、1978）の訳がすでにあるが、梁の長江中流域の年中行事を知ることができる興味深い書籍である。

日本の中国学の裾野を拡大するには、古典の日本語訳と共に概説書の出版が重要となる。新たに発見された曹操高陵の遺物を中心に、東京国立博物館で2019年7月から9月、九州国立博物館で2019年10月から2020年1月まで「日中文化交流協定締結40周年記念 特別展「三国志」」が開催された。渡邉は、『人事の三国志―変革期の人脈・人材登用・立身出世』（朝日新聞社、2019）、『集中講義 三国志 正史の英雄たち―別冊ＮＨＫ100分de名著』（ＮＨＫ出版、2019）、『はじめての三国志―時代の変革者・曹操から読みとく』（筑摩書房、2019）、および渡邉義浩・仙石知子『三国志演義事典』（大修館書店、2019）、渡邉義浩・仙石知子編『全訳三国志』蜀書（汲古書院、2019）のほか、『始皇帝―中華統一の思想』（集英社、2019）、『漢帝国―400年の興亡』（中央公論新社、2019）を出版した。

また、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史』全八巻（筑摩書房、2020）は、世界で展開された哲学の伝統や活動を通時的に見て、将来のあり方を探るもので時宜を得た企画となった。一巻には、中島隆博「中国の諸子百家における世界と魂」、二巻には、渡邉義浩「古典中国の成立」、三巻には、志野好伸「仏教・道教・儒教」、四巻には、垣内景子「朱子学」、五巻には、中島隆博「明時代の中国哲学」・藍弘岳「朱子学と反朱子学」、六巻には、石井剛「中国における感情の哲学」・高山大毅「江戸時代の「情」の思想」、八巻には、王前「中国の現代哲学」が収録される。

このほか串田久治編『天変地異はどう語られてきたか―中国・日本・朝鮮・東南アジア』（東方書店、2020）は、天変地異を儒教・仏教・イスラームやキリスト教などがどのように受け取り、また地域により自然災害への向き合い方がどう異なるのかを論じる。石井公成『東アジア仏教史』（岩波書店、2019）は、紀元前後に東アジアに伝えられた仏教の相互交流・影響を描き出す通史で、訳経のみならず漢字文化圏で独自に創り出された経典にも論及する。小川隆『中国禅宗史』（筑摩書房、2020）は、禅僧の言葉を読み解くための手法について、中国の歴史や哲学を踏まえて解説する。船山徹『菩薩として生きる』（シリーズ実践仏教Ⅰ、臨川書店、2020）は、大乗の根幹と分かちがたく結びつく菩薩としての生き方を論ずる。村田みお・石井公成『教えを信じ、教えを笑う』（同上Ⅳ、臨川書店、2020）は、「写経と仏画」・「仏教の娯楽」という二つの観点か

ら仏教の文化的広がりを論ずる。姜生著、三浦國雄・田訪監訳『漢帝国の遺産―道教の勃興』（東方学術翻訳叢書、東方書店、2020）は、漢墓から出土した画像資料を用い死者の成仙過程の再構築を試み、漢代人の信仰心・宗教観を探り、それを初期道教と位置づける。陶徳民『西教東漸と中日事情―拝礼・尊厳・信念をめぐる文化交渉』（関西大学出版部、2019）は、清の典礼問題から明治末の三教会同までの東西宗教交渉史を複数の人々の関係性から描き出す。マイケルサンデル・ポールダンブロージョ編著、鬼沢忍訳『サンデル教授、中国哲学に出会う』（早川書房、2019）は、正義論の新展開である。深沢賢治『陽明学のすすめⅦ』（明徳出版社、2019）は、佐藤一斎の人物像を描き出す。佐藤弘夫・平山洋編著『概説日本思想史』（ミネルヴァ書房、2020）は、平成思想史を加えた増補版である。

牧角悦子・町泉寿郎編『漢学という視座』（講座 近代日本と漢学第１巻、戎光祥出版、2019）は、江戸後半に明確な輪郭を現す「漢学」を定義づけ、国文学と中国学の視座から中国文化受容の特性を論じる。江藤茂博・町泉寿郎編『漢学と漢学塾』（同上第２巻、戎光祥出版、2020）は、「私塾」を通じて「漢学」の広がりと連続・不連続を明示する。町泉寿郎編『漢学と医学』（同上第３巻、戎光祥出版、2020）は、漢方医学から西洋医学への転換期における漢蘭折衷医学の実態を解明する。江藤茂博編『漢学と東アジア』（同上第８巻、戎光祥出版、2020）は、「東アジア」をキーワードに研究の多様な方向性と今後の可能性を提示する。これらと逆に日本への中国文化の影響を否定した津田左右吉に関して、渡邉義浩・黒崎恵輔・関俊史・瀧口雅依子編『津田左右吉訳稿集 トマス・カーライル『偉人崇拝論』』（早稲田大学文学学術院、2019）は、津田の未公開の翻訳稿を整理・出版したものである。

また、国際会議に基づく論文集も出版された。名和敏光編『東アジア思想・文化の基層構造―術数と『天地瑞祥志』』（汲古書院、2019）は、日本にのみ佚存する『天地瑞祥志』を中心としながら、術数学を含めた論文と『天地瑞祥志』の翻刻・校注を収録する。渡邉義浩編『学際化する中国学』（汲古書院、2019）は、中国社会科学院歴史研究所と東方学会との間で行われた第十回日中学者中国古代史論壇の論文集である。

テーマに則した論文集もある。水上雅晴編・高田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化』（八木書店古書出版部、2019）は、漢字文化圏における年号の具体的な様相や為政者の思惑などを解明する。三国志学会編『狩野直禎先生追悼 三国志論集』（汲古書院、2019）は、三国志学会の初代会長である狩野直禎の追悼のため、三国志の思想・文学・歴史に関わる 14 篇の論文を収録している。

多くの時代をまたぐ研究として、堀池信夫『老子注釈史の研究―桜邑文稿 1』（明治書院、2019）がある。魏晋から明清までの『老子』への主要な注釈を取り上げ、時代ごとの注釈の変容を示す。その際、各注釈家の思想的な背景を鑑み、たとえば魏の王弼については「道」と「無」、唐の玄宗注については「道」と「妙本」という形而上学的概念を中心に分析を行い、想爾注や顧歓・王玄覧などの注釈については、宗教的なアプローチをみせる。それにより、多岐に渉る『老子』注釈のあり方を幅広く、深い知見によって鋭く分析することに成功している。吉田篤志『中国古代思想の考察』（明徳出版社、

2019）は、五帝の神話と歴史の狭間を探ることから、『詩経』『尚書』の分析、親親と尊尊を中心にした思想史研究と西周青銅器の銘文の考察までを行う。さらに、各地の遺跡・博物館・研究所をめぐった見聞録もあり、著書の関心の広さと行動力の高さを窺わせる。浅野裕一『消えた轍―古代中国の面影』（朋友書店、2020）は、殷に由来する人格神としての上帝と周が支配に用いた普遍的上天の違いを明示したうえで、鬼神を遠ざけ上天信仰に基づく統治論を指向する思潮から諸子の時代に中国哲学は幕を開けたとする。そして、『老子』の作者像を探り、『左伝』の成立事情の仮説を提示し、『国語』の著作意図を述べ、『易』と『中庸』を新出資料から位置づける。そののち告子・『荀子』・『楚辞』を分析して、『呂氏春秋』と天人相関説との関係を論じたものである。

このほか黄進興著、中純夫訳『孔子廟と儒教―学術と信仰』（黄進興著作選集1、東方書店、2020）は、孔子の末裔の孔子祭祀が、国家の祭祀系統に組み込まれていく過程と道統に対する価値基準の変遷を分析する。黄進興著、工藤卓司訳『孔子廟と帝国―国家権力と宗教』（黄進興著作選集2、東方書店、2020）は、さらに国家宗教としての儒教の本質を解明し、孔子廟を政治と宗教とが交わる重要な場と捉え、孔子廟従祀制度の変遷に沿って中国思想史の展開を跡づける。片岡龍『16世紀後半から19世紀はじめの朝鮮・日本・琉球における〈朱子学〉遷移の諸相』（春風社、2020）は、朱子学をめぐる文明事象が、朝鮮・琉球・日本においてどのように遷移したかを養生・医学、公共、生命、自然などの視座から論ずる。二階堂善弘『東南アジアの華人廟と文化交渉』（関西大学出版部、2020）は、シンガポールとマレーシアを中心に、東南アジアの華人たちの民間信仰と道教を調査し、ヴェトナム・タイ・フィリピンの道教信仰と廟のあり方を報告する。湯浅邦弘編著『中国思想基本用語集』（ミネルヴァ書房、2020）は、中国思想に関する基本用語をまとめた労作である。（渡邉義浩）

二、先秦・両漢

吉永慎二郎『「春秋」新研究』（汲古書院、2019）は、従来の〈経から伝〉から〈原「伝」から経〉へという新たな視座を提示したもの。著者は『春秋左氏経』の経文を、すべて①抽出文②抽出的編作文③編作文④無伝の経文に分類し、①②を〈抽出系の経文〉、③④を〈編作系の経文〉とする。これを踏まえ、『原左氏伝』の概念は、今本『左伝』から該本に収載する『春秋左氏経』の経文に対する解経文及び『左氏伝』成立時及びそれ以後の附加伝文を除いた部分の伝文テキストを指し、それは今本『左伝』の相当部分となるとする（ｘ）。ただし『原左氏伝』成立後に、『春秋左氏伝』成立後に『春秋左氏経』が制作される際に『原左氏伝』から削除された部分（ｙ）も想定されるが、それは手にしえないため、（ｘ）を以て『原左氏伝』と称して用いるという。この前提に基づき、「〈経から伝〉という視点から〈原「伝」から経〉という視点へのコペルニクス的転換」を確認していくのが本書のみちすじである。本書最大の価値は、既存の価値観のベールを薙ぎ払うことにより得られた〈伝から経〉という新視座にある。そして、最大の価値であるが故に、議論すべき点もまたここにある。先に示したように、著者は『春秋左氏経』は①から④の過程を経て『原左伝』より展開したとする。問題となるのは、④

無伝の経文である。〈伝から経へ〉という過程を経るのであれば、当然経文は伝の中になんらかの形で痕跡を残していなければならない。しかし、無伝である以上、その痕跡を探すことは難しい。著者は、編作者の意図が込められている可能性などを指摘するが、その意図をすべての事例において詳細に説明できれば、本書の説得力はさらに増すと思われる。

岡本光生『先秦思想史上の墨家』（汲古書院、2020）は、著者が長年向き合ってきた墨子についての一連の論考をまとめたもの。本書の最大の価値は、序章「墨子」から一章「「自愛する」個人の発見」で展開される、『墨子』というテキストをできる限りひとまとまりの書物として把握しようとしたところにある。著者は、従来のいくつかの研究は、墨家思想の整合的理解を断念したとし、墨家思想の中に、人間や社会に対する一貫した見方があるとする板野長八の視座を継承した上で、尚賢各篇・兼愛各篇には修辞上の違いはあれども、思想の本質に関わる転換はなかったと喝破する。従来矛盾とされてきた点を検討するに際しては、「自愛」という語に着目し、これを基底とした上で、尚賢上篇における君主も、兼愛上篇における個人も「自愛する」存在であると見、「自愛」という概念によるひとつながりの思想を有した篇であるとする。またこれ以外にも、墨家の天は宗教的実在ではなく、秩序の維持のために要請された法的機能を果たす実在だという指摘、上博楚簡「鬼神之明」と公孟篇の検討から、これらは同時に形成され、具体的にはB.C.60、70年後の成立と論証するなど、本書の内容は多岐にわたる。今後の墨家研究において、必ず参照される書であるといえよう。

藪敏裕『『毛詩』の文献学的研究―出土文献との比較を中心に』（汲古書院、2020）は、『毛詩』について新出の出土文献を合わせて論じたもの。本書の特徴は、出土文献も合わせて『毛詩』について論じたところにあるわけだが、それ以上に重要なのは、著者がその他の文献における『詩』の解釈と『毛伝』の解釈のズレの原因として、時代背景を想定していることである。たとえば、『詩経』征役詩解釈において、『毛伝』の「王事 盬（もろ）きこと靡し」という解釈が『史記』・『淮南子』などに見られないことを根拠に、『毛伝』の成立を宣帝・元帝期以降とし、そのように解釈した原因を宣帝期以降、長期に渡る徴兵・征役が問題になったためとする。このように、ある解釈がなされた背景に、当時における政治的現実的問題を想定するという著者の研究方法は、高く評価されるべきである。

古勝隆一『目録学の誕生―劉向が生んだ書物文化』（京大人文研東方学叢書6、臨川書店、2019）は、目録学の始祖とされる劉向について、総体的に検討されたもの。本書は目録学史上における「点」としての劉向を語るのみならず、時代の流れの中にしっかりと位置づけ、さらに劉向以後の目録学についても検討を加えている。本邦において、これほどまでに目録学さらには劉向、劉向以後の目録学者について網羅的に検討したものは他にない。主張の新味としては、次の点が挙げられよう。一に、劉向らに命ぜられたのは禁中に蔵されていた書物の校書、具体的には未央宮前殿より北に位置した石渠閣・天禄閣の蔵書である「中書」・「秘書」を「温室（温室殿）」において校書を行ったという。校書という作業が具体的にどこで行われたのかは判然としていなかった

が、この指摘により明確にされた。二に、劉向の整理を経た書籍はすべて皇室の所有となっていたため、「叙録」を附した劉向校定の書籍が民間に広く流通したわけではないという点も重要な指摘であろう。劉向らの校書作業を画期として、学術全体に用いられるテキスト改革があったことは事実としても、そのテキストが当時において広範に用いられたわけではないという見解である。本書の最大の長所は、余嘉錫をはじめとした目録学研究者、内山直樹「『七略』の体系性をめぐる一考察」（千葉大学『人文研究』39、2010）・秋山陽一郎『劉向本戦国策の文献学的研究―二劉校書研究序説』（朋友書店、2018）などの近現代の研究を取り込んだうえで、読者に対し劉向を中心とした目録学を一書にまとめて世に問うたことにある。また著者には目録学関連の書として、余嘉錫著、古勝隆一・嘉瀬達男・内山直樹訳『古書通例―中国文献学入門』（平凡社東洋文庫、2008）、余嘉錫著、古勝隆一・嘉瀬達男・内山直樹訳『目録学発微―中国文献分類法』（平凡社東洋文庫、2013）もある。あわせて参照されたい。

渡邉義浩『「古典中国」の形成と王莽』（汲古書院、2019）は、独自の「古典中国」論の形成と成立について論じたもの。著者はまず時代区分論争の文脈に、「古典中国」論を乗せる。儒教の主張により表現される国家の規範型として「古典中国」を設定し、これを基軸として、中国史を「原中国」・「古典中国」・「近世中国」・「近代中国」の四に区分するのである。次に、後漢で成立したとする「古典中国」の指標として、1. 大一統、2. 華夷、3. 天子の三を設ける。この指標を基に、「古典中国」の形成から成立までを検討したのが本書である。「古典中国」の形成から成立に至る階梯を評者なりに示すと次のようになろう。

眭弘の上奏・劉向『列女伝』・劉歆「七略」（「古典中国」形成要素の発生）→王莽の古典的国制（「古典中国」の形成）→班固『漢書』（前漢から『漢書』執筆時までにおける「古典中国」の形成史描述）→白虎観会議（「古典中国」の成立）

これを踏まえ、著者の唱える「古典中国」論と「儒教国家」論について触れたい。著者によれば、「白虎観会議における「儒教国家」の完成が、「儒教国家」の成立を意味するものとしてきた。そして、本章では、それが「古典中国」の成立でもあることを論証していく」（261 頁）という。ただ、著者が唱えた後漢「儒教国家」論は、『白虎通』と現実が齟齬する場合、故事も用いて対応したという両輪により成立していた。すなわち、単純に後漢「儒教国家」＝「古典中国」ではなく、むしろ、『白虎通』を規範として成立した時代区分としての「古典中国」と規範では補えない現実を故事で正統化した後漢「儒教国家」は、截然と区別されるべきであるし、されているはずである。ゆえに、著者の重ねてきた研究を読者に明確に示すためには、「古典中国」という時代区分を背景に、現実の存在形態として後漢「儒教国家」が成立したとより強く主張する方が、分析概念を用いた本研究の意義が読者に明確化されるだろう。

笠原祥士郎『王充思想研究』（朋友書店、2020）は、著者が長年積み上げてきた王充研究が一書にまとめられたもの。以前は、王充研究といえば、『論衡』にみえる唯物論的な記述に着目し、その先進性を言うものが多かった。しかし現在では、大久保隆郎『王充思想の諸相』（汲古書院、2010）に展開される一連の研究のように、後漢の最盛期

に生きた二世紀の思想家である王充が著した『論衡』に虚心坦懐に向き合う研究が主流となっている。本書もその系譜に連なる。とくに、第九章「王充における儒家と王朝」で、従来多くの研究が「頌漢論は漢王朝への阿りであり、王充の自己保身の限界である」とするのに反駁し、『論衡』執筆の最大目的は頌漢論を唱えることにあるという。人格的天の存在を否定したのも、それに代わる宿命を唱えたのも頌漢論を主張するための布石であるとする点には、留保が必要であると思われるが、頌漢論が王充思想の根幹にあったというのは、大久保氏の見解を引き継ぎ、さらに推し拡げたものとして、重大な意義を持つ。ただし著者の行論の中で注意されるのは、人間の有為的な働きをかなり重視するという点である。著者は「夫れ道に真偽有り、真なるものは固より自ずと天と相応じ、偽なるものは人知巧を加へ、亦真なるものと以だしくは異なること無きなり」（59 頁）を「人間の「知巧」によってもたらされた「偽性」も天による自然の「真性」と本質的に違いはなく、人間の有為的な働きは相当に重要なものであると指摘するのである」（59 頁）と解釈する。しかし、この記述がある一段は、上位者が下位者を率勉教導することに重点が置かれており、「偽なるものは人知巧を加へ、亦真なるものと以だしくは異なること無きなり」は「偽なるものにも人（上位者〔聖人か〕）が知巧を加えれば、自然と天と呼応する真なるものと異なることはない」と考える方がよい。ここにいう人は一般的な人間個人を指すのでは無く、上位者であり、その上位者が知巧という作用を加えることにより、偽なる人間も真なる人間と異なることがなくなる。すなわち、この一文からは人間個人の有為的な働きの重要性を導き出すことはできないように思われる。とはいえこれは重箱の隅をつつくようなもので、本書の各章で展開される議論は穏当で、今後の王充研究において、必ず参照される一書であることは変わらない。

堀池信夫『漢代思想論―桜邑文稿 2』（明治書院、2020）は、著者の漢代に関する論考をまとめたもの。該書は「音律学の射程」・「漢代思想論」・「鄭玄学の周辺」の三篇から成るが、紙幅が限られるため、本評で着目したいのは、「漢代思想論」に収録される「漢代の「権」について」という一文である。中国思想において、権という概念は常識に属すると思われるが、それ故か立ち入った検討があまり行われてこなかった。著者の結論は、漢代において権の重要性は気付かれ、整序しようという動きはあったものの、それが深化されることはなく、ともすれば混迷に向かった。それは経を確立しようという急速な動向が、権のもつ大きな罠に気付くまでの認識をもたらさなかったためで、結局漢代から清末に至るまで、儒教が内部に一つの爆弾を抱え込み続ける契機となった、というもの。この指摘は正しいと思われる。ただ、混迷に向かったという点には、留保が必要だと思われる。後漢期には、権という概念を自由に使いこなし、儒法の両立を図っていた王符や崔寔などの思想家がいた。おそらく著者はこのような状況を混迷に向かったとしているのであろうが、権の柔軟性は、むしろ積極的に評価する方がよいと考える。この点は、本書を遺し 2019 年に逝去された著者に代わり、次代の研究者が引き継いでいく課題となろう。

（長谷川隆一）

三、魏・晋・南北朝

まず、大上正美『『世説新語』で読む竹林の七賢』（漢文ライブラリー、朝倉書店、2019）を取り上げたい。「竹林の七賢」と称された人たちの具体的な言動を、それぞれ『世説新語』とその注が引く挿話等で読み込もうとするものである。著者は『阮籍・嵇康の文学』（創文社、2000）において、行動次元の文学性と言語表現の営為とを峻別し、個々の作品に即して内在的に読むという立場を取って、文学することの価値を問うた。一方、本書では、『世説新語』について、正負を超えて自己を自己としてどれだけ徹底して生きているか、その自分なる者を貫く姿に個性を認めるものであると説明している。そして、そこに書かれた「七賢」一人一人の多様な言動を、一人の人間の多面的な生の姿として理解し、それぞれの精神（志）とその個我のありようを捉えようとしている。

仏教研究では、船山徹『六朝隋唐仏教展開史』（法藏館、2019）が挙げられる。本書では思想や実践に関する事例として、「科段」や「音義書」といった中国特有の漢訳経典に対する注釈形態、戒律、仏教における聖者観や捨身などについて検討している。それにより、インド仏教を踏まえながら、劉宋・斉・梁における中国仏教の独自の展開を総合的に明らかにし、そこから隋唐以降の仏教史を見通していこうとするものである。

本書の大きな特徴として触れておきたいのは、筆者はもともとインド仏教から仏教研究をはじめ、その後中国仏教史を専門としており、本書の眼目が、インド仏教と中国仏教の連続性を究明することにあるという点である。たとえば、本書の第一篇第三章は、「如是我聞」と「如是我聞一時」という句について考察している。これまでの研究では、漢訳仏典では「如是我聞」という書き出しのみが認められるとされてきた。しかし筆者は、六朝時代にはサンスクリット文献の経典解釈を継承する「如是我聞一時」という言い方も併存するとし、中国仏教経典解釈史の根本的見直しを迫っている。

なお、本書については、遠藤祐介「書評 船山徹著『六朝隋唐仏教展開史』」（『六朝学術学会報』21、2020）に、詳細な書評がなされている。また、著者は『仏教の聖者―史実と願望の記録』（京大人文研東方学叢書8、臨川書店、2019）も出版しており、六朝から唐初までの中国仏教史を、聖者観によってより広い視点から考察している。

仏教関連のものとして、向井佑介『中国初期仏塔の研究』（臨川書店、2020）についても述べておきたい。考古資料を中心として関連する文献資料と図像資料とを総合的に分析し、インド起源の仏塔がどのようにして中国で受容されたのかを考証している。

道教研究としては、林佳恵『六朝江南道教の研究―陸修静の霊宝経観と古霊宝経』（早稲田大学出版部、2019）がある。本書は霊宝経について、初期の経典を作成した主体は誰であるのか、初期の経典が成立したのはいつ頃かという問題に対して、根本的な見直しを迫る論考である。初期の霊宝経の成立について、従来の研究の中で特に問題となっていたのは、陸修静が編纂したとされる「霊宝経目録」（以下「目録」）において、霊宝経が「元始旧経紫微金格目三十六巻」（「元始旧経」）と「葛仙公所受教戒訣要及説行業新経」（「仙公新経」）の二つにカテゴライズされていることであった。著者は、そもそも古霊宝経に二系統あること自体について、「霊宝経研究の前提となり得るもので

あるのか」と、抜本的な問題提起をしている。そして、陸修静による「元始旧経」と「仙公新経」との分類の基準とその背景にある思想、初期霊宝経における「元始旧経」と「仙公新経」という二系統のカテゴリー概念の有無、『雲笈七籤』に収録されている「霊宝経目序」の記述に見られる陸修静の霊宝経観などについて検討している。これらの考察によって、「元始旧経」と「仙公新経」という二系統のカテゴリー概念に対する見直しの必要性が明らかとなった。著者によれば、陸修静の「目録」に存在する「元始旧経」と「仙公新経」という二系統のカテゴリー概念は、陸修静以前には霊宝経中に存在しておらず、霊宝経の作成者はそのような認識の下で経典を作成していたとも認められない。二系統のカテゴリーは、彼の霊宝経観に基づいて現実に存在する霊宝経を整理し体系化する際に創出された可能性が高いのだという。陸修静の霊宝経観においては、元始天尊が説いたとされる霊宝経を、劉宋建国の時に瑞祥として出現した「天書」と見なし、霊宝経体系の中心におく。これが「元始旧経」である。一方、当時存在していたその他の霊宝経を、劉宋以前に「天書」として存在し、そのまま伝世してきた経典と考えた。これが「仙公新経」であるという。

読者にとって物足りなさを感じさせる点は、著者のいうように「元始旧経」と「仙公新経」という二系統のカテゴリー概念が陸修静の創案であるならば、陸修静が介在する以前の霊宝経の実際の状況は一体どのようなものであったのか、この点について言及が無いことである。しかし本書の研究は、これまで長いあいだ早期霊宝経研究において前提とされてきた「道流」の設定から離れ、また今世紀に入ってから、謝世維、呂鵬志、張超然らが提唱してきた霊宝経の「天書」観を踏まえたうえで、これまでの霊宝経研究のあり方に根本的な問い直しを迫り、霊宝経と初期道教の形成を考える上で大いに示唆に富むものである。そして本書の最大の特徴は、霊宝経について、経自体の成立過程と、陸修静による整理体系化の結果とを完全に分けて考えていることにある。私たちはこれまで無批判に前提としてきた陸修静「目録」によるフィルターの存在に気づかされ、このフィルターを取り払って、早期の霊宝経の実際の状況そのものを明らかにできる可能性を得たといっても過言ではない。

また、神塚淑子の『道教思想 10 講』（岩波書店、2020）が出版された。多様な要素を内包する道教を、『老子』の「道」の思想、生命観、宇宙論、救済思想、修養論、倫理、仏教との関係など、思想面に焦点を当てた 10 のテーマから解説している。本書の内容には、著者が『六朝道教思想の研究』（創文社、1999）や『道教経典の形成と仏教』（名古屋大学出版会、2017）などにおいて論じてきた、『真誥』をはじめとする上清経の世界観に関する研究、『太平経』の思想に関する研究、六朝時代の霊宝経と仏教との関係に関する研究などの成果が盛り込まれており、日本の道教研究を牽引してきた著者の打ち立てた功績の一端を窺い知ることができる。

魏晋南北朝時代は、漢代までのような儒教の権威が失墜して多様な価値観が顕在化した時代である。儒仏道三教が競い合い、知識人は玄学・儒学・文学・史学の四学を兼修することに価値を置いた。吉川忠夫『六朝隋唐文史哲論集』（法藏館、2020）は、そのような時代思潮を念頭におき、この時代の学術思想や宗教を全般的に扱っている。本

書は、著者の『六朝精神史研究』（同朋舎出版、1984）以降の、文史哲に渉る著者の幅広い研究成果の中から編纂された二冊の論文集で、Ⅰ「人・家・学術」、Ⅱ「宗教の諸相」という副題が付されている。

Ⅰ「人・家・学術」は二部からなる。第Ⅰ部「人と家」では主に、皇甫謐「篤終論」、陶淵明「戒子書」、顔延之「庭誥」、徐勉「誡子書」といった家戒や家令が取り上げられている。ここでは個々の家戒や家令の著者とその家族の事績、および子孫に託された内容を手掛かりに、六朝時代の多様な価値観が、一個人の内にどのように存在していたのか、個々の具体的様相を見ることができる。第Ⅱ部「学術」で焦点となっているのは、まず、魏晋南北朝時代における学術や思想を担った、家業として学術を代々伝える家（「学門」「学家」「書生門戸」）である。この部分の内容は『六朝精神史研究』における范氏研究や顔氏研究を継承し展開するものである。第Ⅱ部では、家のほかに、荊州学の展開や汲冢書の発見など、個々の時代においてある地域に現れて広く大きな影響を与えた、いくつかの学術上の局面を取り上げている。学術や思想の主体が、多様な価値観の濫觴の中でどのように自らの学術思想を展開し、どのように社会的に存在していたのかを見ることができる。

Ⅱ「宗教の諸相」の諸論文においても、著者の考察は、その思想の内容や展開にとどまらず、その営為の主体が、時代の趨勢の中でどのように社会的に存在していたのかに及ぶ。七章「襄陽の道安集団」、八章「五、六世紀東方沿海地域と仏教―摂山棲霞寺の歴史によせて―」は、外来の文化体系であった仏教が中国の地域社会と関係しながら展開する様子について論じている。著者は、六朝時代は仏教や道教が社会の各層に広く深く浸潤した「宗教の時代」であり、その根底には罪の意識の自覚の深まりがあるのだという。一章「中国六朝時代における宗教の問題」では、後漢末の太平道や五斗米道に見られる「首過」「思過」、あるいは仏教における「斎堂」「功徳処」「道場」における懺悔などについて論じる。また、劉宋の王微による「告霊文」から、六朝時代の人々の心に存在する深い罪の意識の一例を見る。さらに、漢代の「請室」と道教における「静室」、仏教の輪廻応報の思想をベースとする償債の観念、『真誥』などに見られる「謫仙人」の観念、『太平経』に見られる承負の観念などについて論じ、罪の意識を「宗教の核心をなすもの」として、魏晋南北朝時代を「宗教の時代」たらしめた大きな要因であると述べる。五章「許邁伝」など、上清派と関わりが深い論文も収録されている。これまで著者は『真誥研究（訳注篇）』（吉川忠夫・麥谷邦夫編、京都大学人文科学研究所、2000）をはじめ、上清派研究において数多くの重要な研究を行ってきた。「許邁伝」で主題となっている東晋の許邁は、『真誥』の作者の一人である許謐の兄である。本論文では、主に『晋書』と『真誥』とを照らし合わせながら許邁の生前の事跡を明らかにし、同時に『真誥』中の彼の死後の消息に関する記述を検討する。そして、許邁が東晋において許氏随一の有名な道士でありながら、『真誥』中においては、神々を引き立て、教誡される人々を励ます役割を演じさせられていることを述べる。あわせて、許氏一家、許邁と交流の深かった王羲之らの王氏、王氏と婚戚関係にあった郗氏、許氏と地縁関係と婚戚関係を持っていた葛氏などについても、史書などの記述と『真誥』に記された死

後の地位とを明らかにしている。『真誥』の成立時、その近くにいた人々が天師道と深い関わりを持ち、「宗教」によって結合された「家」を基盤として信仰を保持していた様子を窺い知ることができる。

以上に見てきたように、2019年と2020年の魏晋南北朝時代の思想に関する出版物では、主に仏教研究や道教研究に成果が見られた。これらの研究は新分野を開拓するものではなく、これまで豊富な研究が蓄積されてきた分野に関するものであったが、従前の研究に対して再検討を迫るような視座も見られた。（冨田絵美）

四、隋・唐

最初に船山徹『六朝隋唐仏教展開史』（法藏館、2019）を挙げたい。本書は長年インド、チベット、そして中国仏教を専門としてきた著者の2000年以降に発表された論考を整理したものである。前項の魏晋南北朝でも取り上げているが、あえて隋唐のこの項目で掲げるのは著者が「六朝仏教の展開が直後の隋唐仏教を性格づけた場合が少なくない」と述べるためである。たとえば、第一篇第五章「真諦三蔵の活動と著作」は、斉・梁と活躍した真諦の訳経活動について論じた章であり、真諦はインド仏教の思想をサンスクリット語ではなく彼の漢訳を用いて漢字に基づく解説を施したり、偽経を用いて解釈したことを論じる。そして、こうした真諦の活動を玄奘と対比することで、玄奘の思想の真価を理解することができると述べる。このような言及は広く仏教を研究してきた著者こその見解であろう。また、第二篇第一章の「隋唐以前の戒律受容史（概観）」では唐代までの戒律の展開を概観し、「北朝の地論宗」においては『十誦律』ではなく「法蔵部の『四分律』を重視する動きが起こり、唐代の『四分律』中心主義」に至ったとし、こうした戒律受容の変遷を訳経作業の過程とともに描き出している。本書の理解にはあわせて船山徹『仏典はどう漢訳されたのか―スートラが経典になるとき』（岩波書店、2013）を参照されることをお勧めする。該書はサンスクリット仏典が漢訳仏典となる過程を論じたものである。

武則天期から玄宗期にかけての浄土教の動向を扱った研究として、加藤弘孝『唐中期浄土教における善導流の諸相―『念仏三昧宝王論』と『念仏鏡』を中心に―』（法藏館、2020）を紹介したい。本書は著者も言及しているように、塚本善隆『中国浄土教史研究』（『塚本善隆著作集』第四巻、大東出版社、1976）を発展的に継承したものである。本書が対象とする唐中期は浄土教、天台宗、三階教など諸宗が交錯する状況であった。著者はそのうち浄土教の『念仏三昧宝王論』（以下『宝王論』）と『念仏鏡』の二つの文献を分析対象として、唐中期の浄土教が諸宗をどのように受容したのかについて検討している。まず、『宝王論』は大暦9（774）年以降、飛錫によって撰述されたものであるとし、その思想は「浄土教家の立場から三階教をはじめとする諸思想を受容（統合）している」とする。一方の『念仏鏡』は道鏡、善導らによって天宝15（756）載までに撰述されたものであり、内容は三階教への批判などである。撰述の順序としては『念仏鏡』から『宝王論』となり、『念仏鏡』で示された批判が『宝王論』では受容されているとする。その際に飛錫は三階教の経典を用いるのではなく、『法華経』や『梵網経』

といった正統的な経典を用いて理論を構築している。著者はこれを「仏教界の通念の範疇で三階教を通仏教化（統合）したことを意味する」ものであるとする。こうした諸宗との関わりの中で、各宗派がどのように理論を形成していったかについては、さらなる研究の進展が期待される。

仏教はこうした経典をめぐる動きとともに、その信仰には仏像や壁画といった形として表されたものを通しても行われた。こうした美術としての仏教を対象とした研究として、八木春生『中国仏教美術の展開 唐代前期を中心に』（法藏館、2019）を紹介したい。著者は序で「唐前期の仏教美術の様相を出来る限り明らかにする」ことを問題意識として掲げる。かかる問題を敦煌莫高窟、龍門造像、そして各地の造像の検討の三部より多角的に検討している。詳細な個別検討を通して著者は、特に彫像は「八世紀初頭に如来像の肉体表現についての共通の理解が進み、類似した様式、形式を備えた造像が各地で出現したものの、すぐにそれとは異なるいくつかの様式、形式にとって代わられ」、そうした「古典様式」と呼び得る様式や形式が出現したあと、「今度はそれを崩す方向に向かった」という。著者はこれを「文化の爛熟期に入ったため」と結論づける。なお、これに関連して、唐代の仏教美術を論じたものに肥田路美責任編集『アジア仏教美術論集 東アジアⅡ 隋・唐』（中央公論美術出版、2019）がある。本書には論考 18 篇を収録する。

唐代の美術といえば、ほかに書が挙げられよう。2019 年に東京国立博物館で「顔真卿展」が催され、顔真卿の「祭姪文稿」が初来日したことは衝撃的であった。この顔真卿について吉川忠夫『顔真卿伝』（法藏館、2019）を紹介したい。中国書道史において王羲之と双璧をなすのが、顔真卿である。著者には早くより顔之推や顔師古にまつわる研究（「顔之推論」・「顔師古の『漢書』注」。いずれも『六朝精神史研究』同朋舎出版、1984 所収）がある。さて、該書は終章を含めて八章から構成され、顔真卿の年代をそれぞれの時期に区切って展開する。史書の記述を元にして行論するが、加えて楽府や詩、碑文や書翰を援用して「等身大の」顔真卿をダイナミックに描く。特に「撫州刺史時代」には「麻姑山仙壇記」「魏夫人仙壇記」「華姑仙壇記」といった道教にまつわる碑を相次いで書していることが取り上げられる。これらの碑をあらゆる文献を徴引しつつ、丹念に読み進めていく。終章「書と人」では両『唐書』に顔真卿の書に対する評価がほとんど記されていないことについて触れる。著者は最後に「書よりもまずなによりも大切なのは人間なのだ」と述べ、人間としてのあり方を強調する。そして、「書芸術」は顔真卿の一側面に過ぎず、「諸芸」や「徳義」を兼ねた人間を理想としたに違いないとする。そして、こうした書の評価を「宋代における顔真卿の書に対する高い評価が節義の人顔真卿というその人物評と往々にして分かちがたく結びあわされた」ことに求めるのである。なお、書評は宮崎洋一によるものが『書論』（45 号）に、江川式部によるものが『唐代史研究』（23 号）に、井波律子によるものが「毎日新聞」（2019 年 2 月 24 日東京朝刊）に掲載されている。

こうした顔氏をめぐる研究とともに、氏には多くの隋唐に関する論考がある。それらの諸研究をまとめたものとして、吉川忠夫『六朝隋唐文史哲論集』Ⅰ「人・家・学術」・

Ⅱ「宗教の諸相」（ともに法藏館、2020）の二冊が刊行された。六朝に関わる箇所は先の六朝の項目を参照頂きたい。主に隋唐を扱ったものはⅠでは五篇、Ⅱでは八篇を収録する。両書はⅡの後記にあるように、著者の『六朝精神史研究』以降に発表した諸論考をおおむね時代順に並べたものである。両書の内容が多岐にわたるため、ここで子細に紹介することは難しい。特に思想に関わるものについては主にⅡに収録されており、仏教や道教を中心とするものである。いくつか取り上げて紹介すると、十二章の「王遠知伝」では、上清派・茅山派の道士である王遠知を取り上げ、茅山派の道系について論じている。また、十四章の「一日作さざれば一日食らわず―仏教と労働の問題―」では、仏教における農業労働をめぐって議論が展開される。本来、沙門による農作業は不殺生の戒律を破ることになるため、固く禁じられていた。しかし、禅教団では開墾などの農作業や作務などが教団の維持経営のため、ひいては「参学の場、修行の場」として肯定されたことを明らかにしたのは興味深い。十六章「裴休伝―唐代の一士大夫と仏教―」は、宰相まで至った裴休と仏教との距離、宣宗の復仏との関連を約 180 頁にわたる長編で詳細に描き出す。

経書に関する研究では、野間文史『孝経―唐・玄宗御注の本文訳 附孔安国伝―』（明徳出版社、2020）が刊行されたことをまず挙げたい。本書は『孝経』の訓読、現代語訳と玄宗御注の訳を中心として構成され、六朝期に偽作された孔安国伝の訓読を付す。本書の特筆すべき点は、複雑なテキストの系譜を整理し、今文・古文の対比、『孝経』の伝来と構造を鳥瞰図として明示している点である。次に、補説として述べられている劉炫『孝経述議』における発見である。劉炫は孔安国伝中には儒家文献ではない『管子』の文章が夥しく存在することを指摘した。ただし、このことは著者も述べるように、これまでの『古文孝経』および「孔安国伝」研究ではあまり注目されてこなかったようである。これに着目したのが喬秀岩・葉純芳・顧遷『孝経述議復原研究』（崇文書局、2016）（林秀一『孝経述議復原に関する研究』（文求堂書店、1953）の中国語訳）に附された「古文孝経孔伝述議読本」であった。本書ではその研究成果を承けて、孔安国伝における『管子』の文と一致する箇所をゴチック表記で示している。本書はあくまで一般書であるため、詳細な考証が省かれている憾みもある。だが、著者のこれまでの重厚な諸研究に裏打ちされた『御注孝経』を邦訳で手にできるようになったことは、たいへん喜ばしいことである。

次に、山口謠司『唐代通行『尚書』の研究 写本から刊本へ』（勉誠出版、2019）を紹介しておきたい。今日、我々が目にする『尚書』のテキストと言えば、阮元『十三経注疏』の『尚書正義』や、吉川幸次郎『尚書正義定本』が想起される。だがしかし、そうしたテキストは宋版のテキストを元にしたものであり、それまで写本で流通していた唐代までとではその様相が異なる。著者も「宋代以降の文献については、それ以降急速に発達する印刷技術によって、テキストはある程度固定され」ると述べるが、本書でも明らかにされるように版本においても異同がある。こうした『尚書』復元の試みは清朝考証学のころから行われてきた。たとえば、段玉裁の『古文尚書撰異』、孫星衍の『尚書今古文注疏』などがある。また、我が国では斯波六郎や神田喜一郎による研究がある。

特に清朝考証学者の研究は石刻資料等を用いて、漢代のテキストを復元しようとする試みであった。本書はかかる諸研究の成果を参照しつつ、これらの研究が参照しえなかった敦煌写本や我が国に現存する写本を子細に検討することで、唐代に通行していた『尚書』を復元することに照準を当てている。考察を通して著者は、経文と伝文に揺れがあり、特に孔安国伝にはかなりの揺れがあったと述べる。それは写本が、今日の我々がテキストに対して考えるような固定的性質を有したものではなかったためであるとする。そして、こうした唐写本『尚書』の復元は、魏晋の『尚書』と、宋以降の『尚書』の解釈を架橋するものになるという。かかる成果は、精緻な考証と膨大な論拠によって裏付けられた上で導かれたものである。本書の成果を基にしてさらに『尚書』研究が進展することを期待したい。（関　俊史）

五、宋・元

2019 年の成果としてまず取り上げたいのは、土田健次郎『朱熹の思想体系』（汲古書院、2019）である。本書のコンセプトは、「中国思想史上稀に見るほどの規模を持ち」「論述の整合性と体系性が強く意識されている」ところの朱熹思想の全体像を論じ尽くすことにある。著者にはすでに朱熹思想を論じた先鋭な論文が複数あるが、本書はそれらを解体・再構成し、大幅に加筆した書き下ろしである。論旨は多岐にわたるが、そこに通底する視点は、朱熹の思想は、心の働きが完全に理に一致する存在であるところの聖人を目指すもので、従って基本的には心の問題を軸にする「心学」なのであり、格物や居敬のような修養論は無論、理気論のような世界解釈も成聖という目的に寄与すべく構築せられているというものである。これほどの質量をもって朱熹思想の全体構造を系統的に論じた著述はかつてなく、筆致の明快さと相まって、向後、多くの読者を獲得していくだろう。

土田氏前掲書がいずれかといえば思想の内部構造の闡明に重心があるのに対し、次に取り上げる福谷彬『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、2019）は思想や修養論が政治的社会的に持つ意味や働き、経学上の位置づけといった点に関心を向ける。本書は著者の博士論文をもとにしたもの。朱熹、陳亮、陸九淵ら南宋道学の思想家たちが『孟子』を読み込むことによって、そこから哲学・修養論のみならず政治姿勢、他者の説得術までをも引き出し、各々の対他的姿勢を確立していったことが多角的に論じられる。陳亮や陸九淵と朱熹との論争も取り上げられ、各思想家の主張を支えているのは、やはり『孟子』を資源とする思考であったり説得法であったりすることが示される。朱熹の君権に対するスタンスについて、「壬午応詔封事」と「戊申封事」に基づき、朱熹としては皇帝個人の見解が実際の政策の立案・決定に投影されることに慎重であったとするのも重要な指摘である。その他、朱熹の『春秋』学と『資治通鑑綱目』との矛盾についても調停が試みられており、従来の疑案に挑む意欲的な研究書である。

続いて取り上げる松下道信『宋金元道教内丹思想研究』（汲古書院、2019）は、宋から元に至る全真教や南宗、鍾呂派の内丹思想を論じる。戦前の常盤大定は全真教を、仏教と接近することにより「性功」を摂取し、「不死長生」の迷信を脱した「新道教」と

高く評価する一方、元朝期の南宗との融合を「全真教の堕落」と表現した。その後「新道教」は研究概念として定着するが、著者はこうした構図が纏う近代性に着目し、南宗や全真教の性命説をつぶさに検討することにより、かかる図式が成り立たないことを論じる。そもそも張伯端『悟真篇』では「命功」とともに「性功」も説かれ、両者は相補関係にあり、一挙に「無漏」に至ることのできない中下根の者を対象に説かれたとする。対する全真教は作為を廃し、一気に「真性」をつかむことを目指し、それが達成されれば自ずと「命功」も成し遂げられるという上根的立場を取る。つまり、全真教と南宗との相違は教化対象とする修行者の機根の相違に起因するのであって、全真教が旧来の道教を脱した「新道教」であるからではないとするのである。また「堕落」とされる両教の統合についても、南宗側からは白玉蟾に見られるような「性」の重視、全真教側からは上根的な修行法に従いきれない修行者の存在という、双方に互いに接近しあう要素が元来内在していたことが背景にあると指摘される。

続いて 2020 年である。最初に取り上げるのは、土田健次郎早稲田大学教授の退職を記念し、受業生ら 15 人が論考を寄せた『朱子学とその展開―土田健次郎教授退職記念論集―』（汲古書院、2020）である。宋元に関わるものとしては、垣内景子「朱子と二人の亜聖」、宮下和大「朱熹の言説における負債感情の考察―君臣関係と家族関係における恩を中心に―」を初めとする論文が掲載される。なかでも松野敏之「朝鮮古写徽州本『朱子語類』編纂考―黄士毅語類と黎靖徳語類―」は好論である。本論文は朝鮮古写徽州本『朱子語類』（いわゆる楠本本）の編纂について考究するもの。『朱子語類』は大まかに、池録→蜀類→徽類→徽類再校正（魏克愚校正）と、池録・蜀類等→黎靖徳『語類』の系統があるが、楠本本は徽類再校正に連なる筆写本である。楠本本には黎氏『語類』にはない記述が含まれるなど異同があり、その所以が議論されてきたが、松野氏は「徽類→徽類再校正」の段階の改変は文字校正のみ、「蜀類→徽類」も文字校正や重複記録の削除等に止まるものであり、従って楠本本は蜀類の原型をかなり忠実に留めたものとする。このことから、楠本本と黎氏『語類』との異同は黎靖徳の編纂によるものであると推論する。この方面の研究は、石立善「朝鮮古写徽州本『朱子語類』について―兼ねて語類体の形成を論ずる―」（『日本中国学会報』60、2008）があるが、本稿を得たことで、さらに明瞭な視界を得られた。

次に取り上げるのは中純夫編、朱子語類大学篇研究会訳注『『朱子語類』訳注　巻十六下　巻十七』（汲古書院、2020）である。『朱子語類』巻十四から巻十八には『大学』をめぐる問答が収録されるが、同研究会はそのうち巻十四、巻十五、巻十六前半の訳注をすでに上梓している。本書はその第 4 弾ということになるが、これらの訳業を通じて、『大学章句』がいかに膨大な思索を経てものされているか認識を新たにさせられる。さて、本書が範囲とするのは巻十六が『大学』伝八章～伝十章、巻十七が『大学或問』経一章・伝一章～伝三章である。「格物致知」や「誠意」といった重要なタームのパートは終わり、かなり精細な経書解釈の議論が展開される。しかしそれが彼らにとっては学問の営みであり、「格物窮理」の実践なのであった。本書は、各話頭に示される経学的含意に対する探究はさることながら、「著」「似」「去得」など読み飛ばされがち

な小さな白話の虚詞にまで配慮の行き届いた明快な訳注であり、朱熹たちの「格物窮理」の現場が生き生きと再現されている。　（原信太郎アレシャンドレ）

六、明・清

2019年刊行の著作として、まず岩本真利絵『明代の専制政治』（京都大学学術出版会、2019）を取り上げたい。本書は明代において、皇帝個人の意思がいかなるプロセスや運営を経て実現されるのかなどの問題を詳細に跡づけた著作であり、中国史の分野で取り上げられるべきものであるが、その第六章、第七章に明代後期の思想家・管志道の政治思想が分析されている。管志道についてはつとに荒木見悟による重厚な研究があるが、本書は政治的立場と思想との関連という視点からのアプローチである。著者はまず張居正奪情問題（張居正が父の喪に服さなかったことに端を発する政争）勃発時の管志道の振る舞いにスポットを当てる。管志道は趙用賢ら奪情批判者と近しい関係にあったにも関わらず、求職中ということもあり、「言責がない」を理由に批判を避け、保身を優先した。その後、いったん職を得るが罷免されてしまう。張居正の逝去後、批判者たちの復権が進むが、当時復職運動を展開していた管志道は、それにいわば便乗しようとし、自身が張居正批判のかどで職を追われたというイメージを作ることに腐心した。管志道は帰郷後、出仕を堅く断念し、ひたすら内面世界へ沈潜していったとされるが、実はかように求職活動に血道をあげていた面もあったことが明らかにされる。続いて筆者は管志道の『従先維俗議』を分析、その政治思想を検討する。そこに描かれるのは、三教を束ねる道統の継承者である天子のもと、官僚や万民がそれぞれの分を守り、各々の勤めを果たすのみで決してそこからの越権行為をしない理想世界である。特に、東林党が科道官以外にも「言責」があるとしたのに対し、管志道は科道官以外にそれを認めない。そこには奪情問題勃発の際、保身を優先して批判をしなかった自身を正当化しようとの意図が働いていると著者は推論する。このように、本書は政治的立場という角度をつけることにより、新たな管志道像を映し出すことに成功しているといえる。

続いて取り上げるのは井上徹『華と夷の間＝明代儒教化と宗族』（研文出版、2019）である。本書は2000年に出版された前著『中国の宗族と国家の礼制』（研文出版）以後に発表された複数の論考の集大成であり、中国諸地域のなかでも宗族の普及率が高いことで知られる珠江デルタに視角を設定し、漢族と非漢族が錯居する辺境の地であったこの地域が、16世紀以降、いかなるプロセスを経て漢族の儒教文化に包摂（＝儒教化）されていったかを論じる。そのプロセスは大所高所から論じられ、民族反乱の頻発とその鎮撫、魏校による淫祠破壊と祖先祭祀の普及、社学・里学の設置、黄佐による郷礼の実践、郷紳の台頭から、珠江デルタの中原と選ぶところがない中国的地域社会の完成へと筆が進められる。哲学的な分析は扱われないが、明代中葉以降、儒教が地域社会においていかに浸透し作用していったかを窺うのに不可欠の研究書である。

2020年のものとしては最初に河内利治『黄道周研究』（汲古書院、2020）を取り上げたい。本書は「黄道周という人物を総合的に研究した成果をまとめたもの」である。黄道周の思想構造や学術思想というより、その生平や行実、徐霞客や陳子龍らとの交友、

夫人の蔡玉卿の伝記や書画といった周辺情報の考証と整理に多くの記述が費やされ、明清の文化研究に検討材料を提供してくれる。黄道周が書作を鑑賞するにあたって重んじたとされる「遒媚」という価値基準をめぐる考察も興味深い。ただ、本書にも指摘されるように、黄道周の意識では書法は到底「小道」であって、学術思想にこそその真面目があると考えられ、その意味でいうと、総合的研究を謳う本書において主著といえる『易象正』『三易洞璣』などが「敬遠」され、論じられないのは、やはり少しく物足りない思いがする。「附章」として収録される、陳来「黄道周的生平与思想」の抄訳はその不足を補うものでもあろうが、著者自身の今後の研究の進展に引き続き注目したい。

続いて橋本敬司『人間性とは何か ―中國思想のダイナミズム―』（汲古書院、2020）についてである。本書は 2011 年に逝去された著者の遺稿集である。つごう七章から構成され、うち前の五章が、孔子、孟子、荀子等、先秦時代の思想家を扱う。宋明に関わるのは後ろの第六章・第七章である。うち、第六章は陸象山論となっている。著者の描く陸象山像は一見明快である。象山は、世界・存在・心を一元的に捉え、あらゆる事物の理はたった一つであり、人の心にもこの理が備わっており（「本心」）、学問とはそうした心を確立する（「大なる者を立てる」）ことであるとするのである。ただ、個々の社会規範から人心、宇宙に至るまで、すべて引っくるめて理はただ一つであるというのは、一体いかなる事態なのか、それは道学の「理一」とどう異なるのか、また「分殊」に相当するような個別具体的な理はまったく想定されないのかといった点については不明瞭な部分が残る。第七章はみずみずしい王陽明論となっている。とりわけ第三節は、王陽明の思想を身体の視点から捉え直したものである。陽明は龍場体験を経て自己の身体こそがあらゆる営為の出発点であることを発見、そこから朱子学の言語知を解体していったとする。そうした視点から、著者は学界で強い影響を持つ分析枠組みである本来性／現実性を、身体を隠蔽する図式であるとして批判する。この枠組みを提唱した荒木見悟は本来性と現実性の相即をいいながらも、知行合一を論じる段で、知行はそれが行われる現実においてではなく、あくまでも本来性において合一するとし、現実の身体を置き去りにし、知行を本来性に回収するのである。著者にいわせると、知行は他ならぬ現実の身体においてこそ合一するのであり、本来性という「幻想物語」を構築して議論を展開することは、王陽明が批判解体した当の朱子学的知によって陽明を分析することになる。要するに、朱子学と陽明学とでは知のあり方が根本的に異なるため、同一平面上に並列的に取り上げて論じることはできないというのであって、陽明思想を扱うにあたっての重い問題提起となっている。（原信太郎アレシャンドレ）

七、日本漢学

本学会の大会で「日本漢学」部会が設立されてから 10 年である。「日本漢学」という呼称で括ることができる学術領域は広い。いわゆる「哲史文」といった分野の別も時代区分も越えている。「日本漢学」は「日本列島で書かれた漢文文献を扱う研究」ととりあえずは定義できるであろうが、儒学者の仮名交じり文の著作ならば「日本漢学」に含めることは可能であろうし、一方で、詩文はともかく、僧侶の宗学関係の漢文文献

が「日本漢学」に入るかは意見が分かれそうである。このように本学会の「日本漢学」は茫洋として捉えどころがないともいえるのだが、悪いことばかりではないであろう。「日本漢学」という枠組で様々な研究をまとめて捉えることで見えてくることも少なくないからである。

先ず、「日本漢学」という領域の難しさと面白さを考える上で示唆に富んだ論集として、滝川幸司・中本大・福島理子・合山林太郎編『文化装置としての日本漢文学』（勉誠出版、2019）を挙げたい。所収の論文のマシュー・フレーリー「英語圏における日本漢文学研究と日本漢詩文」は「日本漢詩」の訳語（Shino-Japanese poem,Sinitic Poem など）をめぐる議論を紹介する。日本語あるいは中国語から離れ、他の言語を介在させることで「日本漢文学」乃至は「日本漢学」の錯綜した状況が解きほぐされることもあろう。また、日本の漢詩文が近代中国の人士に与えた影響を取り上げた論考も収録されており、中国から日本へと、一方向的な影響関係での捉え方に反省を促している。

2019 年 4 月の新元号「令和」の発表は、日本文化における「漢学」の問題を、少なからぬ人々に意識させる出来事であった。出典の『万葉集』は内閣総理大臣の談話（2019 年 4 月 1 日）において「我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書」であると説明された。現在の「国書」という概念（「漢籍」を対立概念とする）は近代日本の学術機構の編成の問題を抜きに考えることはできない。これについては 2019 年の品田悦一・齋藤希史『「国書」の起源―近代日本の古典編成』（新曜社、2019）に詳しい。元号をとりまく文化・学問に関しては、水上雅晴編、髙田宗平編集協力『年号と東アジア―改元の思想と文化―』（八木書店古書出版部、2019）が充実した論集である。同書の清水正之「年号と暦法―本居宣長における作為「人作」と自然「神作」―」にあるように本居宣長は、中国から渡来した、彼の目から見ると煩雑な暦法そのものを否定していた。「日本的な元号」（？）以前に「日本的な暦とは何か」について「からごころ」を排して議論した人は、果たして平成の世にいたであろうか。

近代日本の学術分野の編成の中で、漢文で書かれているがゆえに「国文学」の枠組の中で周縁に置かれた書物に『日本書紀』がある。2020 年は、『日本書紀』編纂 1300 年の記念の年であった。山下久夫・斎藤英喜『日本書紀 1300 年史を問う』（思文閣出版、2020）は、『日本書記』の成立から近現代の受容に至る歴史を一望することが出来る。

同じ漢文を用いていても、漢学的な知識が置かれていた社会的な文脈は時代ごとに様々な変化が見られる。滝川幸司『菅原道真―学者政治家の栄光と没落』（中央公論社、2019）は、道真の「紀伝道出身の官僚」という側面に注目し、道真の詩文の背後にある当時の社会体制や政治動向を明快に描いている。東アジアの他の地域の儒学的教養人と平安期の「儒家官僚」の比較も興味深い問題であろう。本間洋一『王朝漢詩叢攷』（和泉書院、2019）所収の論考は、道真の詩の従来の解釈を検討し、新解を示す。『菅家文草』の諸作に「遊び心に富んだ」機智的な表現が見られるという指摘は当時の漢詩文が政治社会の中で有していた機能に対して示唆に富んでいよう。同著者の『日本漢文学文藪：資料と考説』（和泉書院、2020）も、江戸期の林家の論考などを収める。

中世における漢学の重要な担い手は僧侶であるため、僧侶の具体的な交遊・活動を明

らかにすることはこの時代の漢学・詩文を考える際には不可欠である。朝倉尚『禅林の文学―戦乱をめぐる禅林の文芸』（清文堂出版、2020）は、応仁の乱の時期における横川景三の動向と作品を検討する。戦乱を避けた横川は寄寓した土地で知友と聯句を制作する。緊迫した状況の中であるからこそ、人々との交流の中で作られる聯句が好まれたという著者の指摘は、広く「戦時下」乃至は「緊急事態下」の文学を考える上で長い射程を有するものであろう。朝倉和『絶海中津研究―人と作品とその周辺』（清文堂出版、2019）は、浩瀚な著作であるものの、絶海に関する伝記研究、作品研究、そして絶海に関わる事柄の研究という構成になっており、五山文学研究の一つの範型を示している。中世における漢学的教養の在り方を考える上で、好個の材料となる文芸に和漢聯句がある。大谷雅夫『和漢聯句の楽しみ―芭蕉・素堂両吟歌仙まで』（臨川書店、2019）は、和漢聯句をどのように解釈し、味わうべきなのかを実例をもって示す。中国中心主義的な発想からいえば和漢聯句は、こなれない漢詩句と侏離鴃舌が入り混じった奇態な文芸であろう。しかし、本書が明らかにする和漢聯句の世界は魅力的である。近年の句題詩や和漢聯句の研究が明らかにしているのは、中国とは異なる規則と評価基準の体系の中で、日本の漢文学が展開したことである。中国の詩文と同じ物差しで日本の漢詩文を測ることは、楕円形のボールを使った競技であるといってラグビーとアメリカンフットボールを混同して品評しているのに近いのではなかろうか。

仮名交じりの文献ではあっても、江戸期の儒者に与えた影響を考えれば、『神皇正統記』を「日本漢学」の項目で取り上げても良いであろう。齋藤公太『「神国」の正統論―『神皇正統記』受容の近世・近代』（ぺりかん社、2019）は、近代に至る『神皇正統記』受容史を論じる。『正統記』受容という視点によって、江戸中期の学知の変化（本書は「考証主義」の「興隆」と称する）が描き出されており、興味深い。

「日本漢学」研究は、必ずといっても良いほど、文化を受容する側の論理の問題に向き合うことになる。丸井貴史『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究』（汲古書院、2019）は、『今古奇観』諸本の緻密な調査に立脚して、都賀庭鐘が白話小説を「学問の対象」として捉え、「三言」と『今古奇観』を校合した上で『英草紙』を執筆したことを明らかにする。本国では「学問の対象」となり得ないものを「学問の対象」として捉えるという受容側の論理が新たな文学世界を切り拓いたことを示す。長尾直茂『本邦における三国志演義受容の諸相』（勉誠出版、2019）は、『三国志演義』受容後の諸相だけでなく、白話小説が日本において一つの文芸ジャンルとして認知される過程にも光を当てる。白話小説の受容は、黄檗文化の渡来とも深く関係している。竹貫元勝『隠元と黄檗宗の歴史』（法藏館、2020）は、今後の黄檗研究の基礎となる著作である。

江戸思想史研究の領域では、東アジアの他地域との比較を意識しながら、江戸儒学特有の問題関心を明らかにするという試みが自覚的になされてきた蓄積がある。中村春作『徂徠学の思想圏』（ぺりかん社、2019）は、1980 年代から 2010 年代の著者の荻生徂徠研究が集成されている。初出論文にかなりの修訂が施されているものの、上記の試みの展開の優れた実例を本書に見ることができる。片岡龍『16 世紀後半から 19 世紀はじめの朝鮮・日本・琉球における〈朱子学〉遷移の諸相』（春風社、2020）は、東アジア各

地域の朱子学の展開を生態学の「遷移」という概念を「作業仮説」的に用いて理解することを試みる。「一国思想史」の枠組、さらにいえば「思想史」という学問のあり方を乗り越えようとする著者の意志が随所に表れている。一方、板東洋介『徂徠学派から国学へ―表現する人間』（ぺりかん社、2019）は、東アジア思想史的な観点ではなく、荻生徂徠と賀茂真淵の二人を対比的に検討するという先祖帰りとも見える手法を用いる。しかし、一見、小さな問題関心に見える本書が浮かび上がらせる問題は大きい。「心」を重視しない「型」の思想の二つの類型として徂徠と真淵の思想を位置付け、両者の思想の対比から現在においても示唆に富む知見が示される。徂徠に関しては、荒井健・田口一郎訳注『荻生徂徠全詩 1』（平凡社東洋文庫、2020）が刊行され、文学方面の研究も進展している。

「型」に関わる研究として、この十年で急速に研究が蓄積された分野に、日本における『家礼』受容の研究がある。2010 年以降、吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』（関西大学出版部）が刊行され、2019 年は『家礼文献集成　日本篇　八』に至っている。松川雅信『儒教儀礼と近世日本社会―闇斎学派の『家礼』実践』（勉誠出版、2020）は、浅見絅斎・蟹養齋・稲葉黙庵らの『家礼』をめぐる議論と実践を分析する。寺請制度などの障碍によって、江戸期の儒者は『家礼』という「型」の忠実な実践が困難であった。しかし、彼らは納棺や埋葬といった「自由領域」を見出し、そこで「型」を守ることで儒学的教養人としての自己意識を堅固にしていたことを明らかにする。James McMullen “*The Worship of Confucius in Japan*”（Harvard East Asian Monographs, Harvard University Asia Center. 2020）は、著者の釈奠研究の集大成である。

懐徳堂に関しては、清水光明『近世日本の政治改革と知識人―中井竹山と「草茅危言」』（東京大学出版会、2020）と藤居岳人『懐徳堂儒学の研究』（大阪大学出版会、2020）の二著が刊行された。前者は、堀田正順・松平定信といった為政者たちと竹山の関係を丹念に検討し、「草茅危言」が寛政期の政治状況に強く規定された著作であることを明らかにする。一方、後者は近世日本の「儒者」の存在様態に着目しながらも、経学的な手法を軸にして懐徳堂の学問の特質を考察する。政治への参与に積極的で、世知に長けた兄の竹山と、狷介な為人で朱子学から遊離していった履軒は、江戸期の「儒者」の「家」を考える上でも面白い素材である。

近代日本の「漢学」に対する研究は現在発展の著しい分野である。2019 年から 2020 年に刊行された『講座　近代日本の漢学』全 8 巻（戎光祥出版）は、今後の近代日本漢学研究の指標となるシリーズといえる。野間文史解題、町泉寿郎・川邊雄大解説による加藤虎之亮（1877 ～ 1958、号天淵）『周礼経注疏音義挍勘総説』（近代日本漢学資料叢書 3、研文出版、2019）、町泉寿郎解題による木下彪（1902 ～ 1999、号周南）『国分青厓と明治大正昭和の漢詩界』（近代日本漢学資料叢書 4、研文出版、2019）、武田祐樹・町泉寿郎解題による川田剛（1830 ～ 1896、号甕江）『甕江文稿』（近代日本漢籍影印叢書 2、研文出版、2020）といった関連資料の刊行も進展している。近年、「日本漢学」関連文献は、中国での影印出版が増えており、2019 年には陳広宏・侯栄川編『日本所編中国詩文選集匯刊』明代巻（広西師範大学出版社）、2020 年には卞東波・石立善主編

『中国文集日本古注本叢刊』（上海社会科学院出版社）が刊行された。影印出版に関して国境にこだわる必要性はないが、近代日本漢学に関する影印・資料の出版は頼もしい。

李セボン『「自由」を求めた儒者―中村正直の理想と現実』（中央公論新社、2020）は、中村正直（1832 ～ 1891、号敬宇）の思想を内在的に読み解くことで、儒学的な思考の延長にある彼の思想体系の中に西洋思想やキリスト教が矛盾なく包摂され得たことを明らかにする。

山村奨『近代日本と変容する陽明学』（法政大学出版局、2019）は、近代以降、「陽明学」がいわばマジックワード的に意味を拡張しながら、反体制的な思想という魅力を時に帯びつつ受容されていくことを分析する。本書は末尾で現代の「陽明学研究」と「近代日本の陽明学」の関係を取り上げる。近代日本漢学研究は、中国学の研究史理解と接続する。「近代日本漢学」さらには「日本漢学」研究は、中国学に間借りしている居候ではなく、中国学の足元を照らす灯としても重要な意味を持っているといえよう。

（高山大毅）

◉文　学

本年の「学界展望（文学）」は、一昨年と同様、東京大学に所属する関係教員が執筆を分担し、大学院人文社会系研究科中国語中国文学研究室の齋藤希史がとりまとめを行った。

展望の執筆にあたっては、2019 年および 2020 年に日本国内で刊行された単行本を中心に、執筆者それぞれの視点から、領域ごとの研究の大きな流れが見えるよう努めた。二年分が対象となったのは、昨年の執筆時期に新型コロナウイルスの感染拡大防止のために大学や図書館の立ち入りに制限が加えられる事態となり、調査と執筆に支障を来したため、出版委員会での協議を経て、この分野の展望掲載を見合わせたことによる。

なお、本年の分類は、「総記」「先秦・両漢」「魏・晋・南北朝」「唐・宋」「元・明・清」「近現代」とした。齋藤（「総記」「魏・晋・南北朝」「唐・宋」）以外の執筆者は、項目の執筆順に、田口一郎（総合文化研究科、「総記」）、谷口洋（総合文化研究科、「先秦・両漢」）、上原究一（東洋文化研究所、「元・明・清（戯曲・小説）」）、大木康（東洋文化研究所、「元・明・清（詩文）」）、鈴木将久（人文社会系研究科、「近現代」）である。

（齋藤希史）

一、総記

「総記」については、図書分類上の「総記」という項目にこだわらず、「比較文学」「日本漢文学」等に関する著作もここで言及することとした。領域にとらわれない研究が近年盛んになっているからである。

まず飯倉照平『中国民話と日本―アジアの物語の原郷を求めて』（勉誠出版、2019）。著者の南方熊楠研究や中国民話の翻訳はすでに何冊かにまとめられているが、民話研究に関しては初の論考集。著者の逝去直前に出版された。全体は「孟姜女民話の生成」